

で実行できるようにする。

現在の版は『スールヤシッタータ』に基づいているだけであるが、他の天文学書に基づいた暦の可能性も考慮に入れられるように拡張し、さらにインドにおけるイスラム暦や南インドの太陽暦も選択肢の中に加えるようにする。そのためにインド古典天文学書とイスラム天文学書を研究する。

天文学や暦法のプログラムは数多く存在するが、すべて現代天文学に基づいた計算をしており、理論的枠組が異なるので、実際に用いられていたはずの暦と一致しない場合が多い。本プログラムは古典天文学書原典に基づいて古代の暦をそのまま再現しようという試みであり、この点で世界でも例を見ない。

#### 研究計画・方法

現在ハーバード大学に留学中の伏見誠氏と緊密な連絡をとりながら、TurboPascal用のプログラムPANCANG 2. PASをPerl用書き換える。これと平行して、インド古典天文学書の原典を読み、暦計算のアルゴリズムをできるだけ忠実にプログラムに反映させ、学派による天文定数の相違を考慮に入れられるようにTurboPascalのプログラムを改良する。その結果をPerl版でもとりいれる。そのためにはMS-DOSとPC Unixを1台のマシンで用いることのできる軽量かつ高性能なポータブル・コンピュータが必要である。

古典天文学書の研究に当っては、代表的な天文学書の電子テキストを準備しておくことと便利なので、研究補助員に入力を依頼する。またインドへ出張し暦法資料を収集する。

●現在実用化されつつあるUnicodeは一般的な商用利用に限定したコード化を行っているため、将来ISOが新たなコード体系を制定するのを待つ間は、いまだコード化されていないような文字や言語を使用する古典研究のためには独自の多言語処理体系を開発する必要がある。本研究で開発するシステムは、同一言語多書記法 (script) 表記や同一書記法 (script) 多言語表示を可能とすると同時に、PerlとTeXを用いることによって研究者各人による容易なカスタマイズを可能にすることで、現在のような過渡期において十分に実用的かつインド以外の東南アジアにも拡張可能なシステムとなることから、広範囲の古典研究者にとって強力なツールとなるであろう。

#### 研究計画・方法

1.すでに開発済みのカンナダ語TeXシステムを拡張して、既存のナーガリー文字・タミル文字・マラーヤラム文字のTeXシステムを統合してPerlによる一つのPre-processorで4種類の文字が出力できるようなシステムを開発する。

2. PostScriptプリンタを導入して、PostScriptフォントを用いるltransのようなシステムを解析して参照すると同時に、TeX出力を直接PostScriptでも利用できるように対応する。

3. グランタ文字のテキストを入力して、印刷本と対照することによって、グランタ文字の結合文字の分布、3文字以上の結合の場合の下付き処理のあり方をすべて抽出する。

4. ローマ字表記のサンスクリット語テキストのハイフネーション区切り規則に関して、出版本に当たると共に、全国のインド学者から意見を取りまとめる。

---

### A03 古典学のための多言語文書処理システムの開発

研究代表者 高島 淳  
東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 助教授

#### 研究目的

●本研究においては、インド古典研究における多言語処理の要望に応えるべく、現在研究者が使用している多様な転写入力方法に対応していると同時に、その一つの入力方法からローマ字転写、ナーガリー文字、グランタ文字、カンナダ文字、タミル文字、マラーヤラム文字を印刷出力とすることの出来るシステムを構築することを目的とする。また、ローマ字転写においては、語の構成要素に出来る限り従うようなハイフネーション区切りの方式も開発する。

---

### A04 「古典の世界像」

---

#### A04 中国古典に現れる通常語についての再検討

研究代表者 木下 鉄矢  
岡山大学文学部 助教授

#### 研究目的

日本人が中国の古典を読解する時に大きな障害となってきたのは、そこに現れる極くありきたりの、例えば「為」「道」「動」「用」「照」「明」などの漢字が、日本でもやはり極くありきたりに使われるものであるために、ほとんど無自覚にその日本語としての意味をそのまま中国古典に現れるそれらの漢字にも当てて読んでしまうと

いう特殊な事情の存在である。この障害は学術的な読解の場面でも払拭し難いものがあり、従来の日本における中国古典についての研究はこの障害に半ば生得的とも言い得る制約を受け、そのために基礎的な読解レベルでの焦点深度の甘さを抱えたままに内容についての議論が進められて来た。中国古典についての読解が鮮明な議論を展開し、従来の理解の水準を超えるためには、その最も基礎的でありきたりに現れる通常語についての再検討が必要である。

一般的には、これら通常語の「意味」「文法」こそがそれらの古典語を運用していた人々の世界への捉えかかり方を最も通常に形成しており、そこに形成された世界への根本的且つ通常的な捉えかかり方が、より意識的に採り取られ構成された「世界観＝世界への知」に暗黙裡に基礎を与えていると考えられる。すなわち、中国古典に現れる通常語の分析は、中国の思想史や文学史、より広く文化史・精神史に共通する「言葉による世界認知」の日常的であるが故の深層を分析することに繋がっているのである。

古典漢語についての分析を世界認知の深層にまで進めることは、近代以降の「知」の全般に浸透して来ている「機械論」的な世界認知の方式を意識的に相対化することを要請する。現代の「古典学」が、いずれにもせよ現代の知性に共有される言葉で「古典」を分析・記述し、さらに翻訳するという形のものである限り、この現代の知性に「規範」として浸透しつつある「機械論」的発想は、我々の「古典」理解をその「規範」へと標準化して行く力を持っていると思われる。したがって現代の古典学は、常に、自らが使用せざるを得ない用語そのものによって古典に固有の発想を「機械論」の地平に標準化してしまっているのではないかと問わねばならない。古典漢語における通常語の分析においてもこの点に特に注意する必要がある。またこの問題に触れる程の深さにまで分析を進めなければ、実はその理解も鮮明になったとは言えないのである。

本研究は、具体的には、基礎的な中国古典文献に現れる通常語を取り上げ、近年発展しているコンピュータを主に利用して用例を精査し、その意味・語感・文法的性格等を考察して行く。従来明確には問題化されて来なかった基礎的な読解レベルでの問題を各々の具体的なテキストに就いて提起し、それをこのような通常語の再検討の中で解決する、ないしは見通しを示す。このような具体的な作業の中で上述の課題 日本語による漢字理解を相対化し古典漢語そのものとしての語義を探り、古典漢語における世界認知の深層を現代の「機械論」的発想に対質し得る程の鮮明さにおいて分析するという課題

を果たし、そのことによって現代の我々に迫る新鮮な「古典」の姿を洗い出すという「古典学」の変わることのない方途を具体化することを目的とする。

## 研究計画・方法

当該の研究目的を果たすために、1. 中国の伝統的な古典学の成果、特に清朝考証学の成果を生かす、2. 最近の内外の古典漢語の文法・語義についての研究に参照する、3. 中国古典籍についての一字検索を可能ならしめるデータ・ベースに就いて、その用例を精査する、の三点を基礎に据える。1. 2. についてはすでに蓄積されている書冊や論文の形で資料を蒐集し、その情報を対象とする通常語ごとに集積する。3. については、現在すでに出現しているCD-ROMの形でデータ・ベース（「漢達古籍資料庫」「全唐詩」「漢語大詞典」など）、これから出る予定のデータ・ベース（「四庫全書」原文及全文検索版、11年度内に発行の予定、など）、さらにインターネットにおいて公開されているデータ・ベース（「二十四史」「朱子語類」など）を蒐集・利用し、本研究に生かして行く。11年度については特に、3. の蒐集・利用の前提となるハードの面での設備環境の構築と、その操作システムを構築する。中国古典についてのデータ・ベースは、OSについて、中国語版Windows、MS-DOS、日本語版Windowsなどに対応が分かれており、1台のパーソナル・コンピュータだけでは作業の効率、同時検索の不能等より、限界が大きいので、二台の機器による利用環境の構築を行ないたい。11年度においてこのような機器環境の構築を果し、12年度以降は様々なデータ・ベースを使い、中国古典文献において通常語と認められる語を具体的に選び、その用例に即してそれらの意味・語感・文法的性質についての考察を行なう。この際に、1. に指摘した諸資料、特にその集大成とも言うべき規模と質の高さを持つ段玉裁の『説文解字注』の記述に参照して、各語の古典漢語そのものとしての語感を探り、かつ2. に指摘した文献にも広く参照して、従来の「漢文訓読」ないし各漢字の日本語としての意味理解を相対化し、古典漢語独自の世界認知の有様に分析を加えて行く。さらに日本における古典学諸分野での研究状況・成果と本研究の成果との勘案を各種の研究会への参加によってはかり、そもそも現代の日本語によって「古典」について分析・記述し、さらにはその「古典」を現代の日本語へと翻訳する我々の思考行為・言語行為の裡に横たわっている困難の深層を見極め、そのことによってむしろ異貌へと洗われた古典が現代の我々に襲い掛かる「現場」を現出する古典学研究・翻訳のあるべき姿を探り、その成果を発表して行く計画である。

## A04 朝鮮古刊本及び古鈔本の調査とその文献学的研究

研究代表者 藤本 幸夫  
富山大学人文学部 教授

### 研究目的

①日本には韓国・朝鮮にもない多くの朝鮮本が存在するが、その所在の明白でないものが多く、又それらの書の刊年や刊地、同版・異版の区別も殆ど明らかでない。筆者はこれらの書籍に從來にない28項目に亙る詳細な検討を加え、朝鮮印刷文化の糾明に努めており、又副産物として日本に存在する朝鮮本の総合目録を予定している。これは朝鮮学研究の基礎であり、現在朝鮮本の所在未詳のため研究者が抱えている不便を一気に解決することになるであろう。既に30年近く作業を続け、全体の6～7割は完了している。此度の助成を得られれば、8～9割近く迄調査を完了し得るであろう。

②朝鮮本の研究は中国学・日本学とも深い関係にある。中国の佚書や異本が朝鮮刊本として存在することも少なくない。筆者はその発見に努めて来た。又日本には朝鮮刊本の翻刻がかなり多い。特に江戸時代には多く、日本の学問や文芸に深甚な影響を与えている。しかし朝鮮本の詳細な研究が先行していないため、和刻本の藍本は明らかでない。藍本の発見、ひいては朝鮮文化の日本への影響を知るためにも、朝鮮本の研究は重要である。台湾故宮図書館蔵の貴重朝鮮本は江戸時代日本にあったもので、明治期に中国人楊守敬によって購入されたものである。従ってこれらは筆者の調査対象であって、11年度には調査を実施したい。

③日本現存朝鮮本目録の完成は、朝鮮学のみならず、中国学・日本学研究者にも便宜を与えること甚大である。朝鮮印刷文化の研究は、朝鮮文化の核心に迫ることでもある。朝鮮刊本には無刊記本が多く、その刊行時期や刊行地を特定することは困難である。筆者は全調査書の刻工名を蒐集して来たが、これを手掛りとして刊行時期や刊行地の特定を、かなりの可能性をもってなし得る。刻工名の網羅的研究はこれ迄行われていない。

④本研究を進めるのは日本で筆者一人であり、韓国の学会、更に中国・日本の学会からも一日も早い完成が要望されており、筆者もこれに応うべく一年の1/3～1/4を調査に充てて努力している。文部省や民間財団の助成で研究を進め、又データベース助成も得て入力中である。再来年には目録の第一冊（集部）を刊行したく思っている。

### 研究計画・方法

東京では国会図書館・尊経閣文庫・静嘉堂文庫・東洋

文庫、関西では京都大学・陽明文庫・大阪府立図書館・杏雨書屋・天理大学等の未調査書の調査を28項目にわたって行う。資料は自己撮影、それが不可能な所では依頼撮影する。

夏期休暇時に約一ヶ月台湾故宮図書館蔵等の調査を行う。ここに所蔵される善本朝鮮版は明治以前には日本にあったもので、筆者の調査対象に入る。

## A04 インド古典における言語論の展開の解明とその比較的考察

研究代表者 赤松 明彦  
九州大学文学部 教授

研究分担者 船山 徹  
九州大学文学部 助教授

### 研究目的

古典期インドにおける言語論（言語哲学）の展開と、文法学がそれに果たした役割の解明を主要テーマとして、古典テキストの読解によってその構造を分析し、さらにインド古典期の思想・論理体系に対してそれらがいかなる意義をもっていたかを明らかにする。

古典言語論テキストのデータベース化を計り、それに基づく分析と解明を行った上で、インド古典期の言語論を、西洋における言語論の展開をも視野に入れて、普遍的な枠組みの中に位置づけ、比較論的考察を行う。

この作業の中で、インド古典、特に哲学・宗教・文法学の用語の翻訳に関わる諸問題を検討し、日本語による新たな翻訳の可能性を考察する。

### 研究計画・方法

主たるテキストとして『ヴァークヤ・パディーヤ』を選び、全巻について注釈も含めたテキストデータベースの完成を計る。完成したデータベースに基づき、語彙研究を行い、古典言語哲学における鍵概念について、その明確な内容把握と日本語の翻訳の提示を試みる。この作業において、語彙研究と思想研究におけるコンピュータ利用の可能性を探る。（処理能力の高いパーソナルコンピュータを備える。）

言語論・言語哲学を専門とする諸領域の研究者との直接的対話を行う。この際、分担者は、仏教認識論における言語哲学についての分析・解明を行う。言語論関係の新たな成果を示す図書を購入手、新たな知見を得るとともに、他研究機関に所蔵される諸文献資料を調査研究する。（国内調査旅費、図書購入費。）

以上の作業に基づいて、「言語論を基礎づけるものと

しての文法学が果たす役割」および「言語と論理、そして文法学と存在論」という本研究が最終的に設定しているテーマを考察するための基礎を固める。

---

## A04 ハカーマニシュ期からサーサーン期にいたるイラン系王朝内外の諸集団における世界認識

研究代表者 春田 晴郎  
東海大学文学部文明学科 助教授

### 研究目的

申請者が申請する研究の対象年代は、前6世紀半ばのハカーマニシュ（アカイメネス）朝の西アジア征服から、後7世紀半ばのサーサーン朝滅亡までである。

申請者は、対象とする時代について、支配集団のみならず配下や周辺の各集団の世界認識を挙げて、共通点・相違点を明らかにすることを研究の目的としている。もちろん、ハカーマニシュ朝やサーサーン朝の王碑文が、対象史料の中で重要な部分を占めるのは言うまでもない。

とくに、次の点に注意しながら研究を進めていく。

一つは、研究者によってさまざまに用いられている「イラン」の意味を整理し、違う意味の「イラン」を混同しないようにすることである。もう一つは、「世界を西と東とに二分する歴史観」の形成についてである。ギリシア・ローマの相違を無視した「西の一体性」、そのアンチテーゼとして「自由の無さ」で括られる「東の一体性」および両者の峻別、このような世界観がこの時代のローマに存在した。いっぽう、「東」側の世界観についても、サーサーン朝初期の帝王浮彫・碑文などを材料に検証する。

### 研究計画・方法

研究代表者が一人で行なう研究なので、組織図については省略する。

「古典学の再構築」に対する公募研究である以上、古典史料の研究に占める比重はきわめて高い。そのため、史料や研究書などの書籍にかかる経費が大きくなる。また、外国旅費については、欧米（ロシアを含む）と現地（イラン・ウズベキスタン・トルクメニスタン・シリア・情勢が許せばイラク、など）双方での史料収集や実地検分（浮彫に付せられた碑文など）が必要になる。そのため、比較的、外国旅費の申請が大きくなっている。

さて、研究計画課題は大きく二つに分けられる。一つは史料収集や世界認識を示す部分を洗い出していく作業である。これは、古代ペルシア語、中世ペルシア語、バビロニア語、ギリシア語、ヘブライ語、アラム語などの

諸史料を渉猟する作業であり、書籍の入手が占める比率が高い。また、基本的な用語についての対照も行なう。もう一つは、理論的な検討であり、「研究目的」の項で述べた考察を進めていく。とくに、西暦紀元前後までの、「世界」の交流が強かった時期と、それ以降、西にローマ、東にアルシャク朝のちにサーサーン朝が、ユーフラテス川を挟んで対峙する時期との相違を明らかにしてみたい。

---

## A04 「イスラーム哲学におけるアリストテレス『デ・アニマ』受容と靈魂論の展開」

研究代表者 小林 春夫  
東京学芸大学教育学部 助教授

### 研究目的

イスラーム哲学は、9世紀から10世紀にかけてアッバース朝下で行われたギリシア古典のアラビア語訳に始まり、イブン・スィナー（アヴィセンナ、d.1037）による体系化およびイブン・ルシュド（アヴェロエス、d.1198）によるアリストテレス注釈の完成をへて、13世紀の照明学派に至る。このイスラーム哲学史の流れを「移入期」「確立期」「展開期」に3区分し、それぞれの時期におけるアリストテレス『デ・アニマ』受容の実態を明らかにするとともに、またそれに基づいて発展したイスラーム独自の靈魂論の特徴を文献学的に解明する。

### 研究計画・方法

本年度は、上記の研究目的のうちの「移入期」の研究として、アリストテレスの『デ・アニマ』およびそれに関連するヘレニズム期の文献がどのようにイスラーム世界に移入されたかを明らかにする。

この分野における研究は欧米を中心にすでに一世紀以上の蓄積があるが、その成果は我が国において十分に紹介され検討されているとは言い難い。したがって、第一に、これまでに公刊されたアラビア語（ペルシア語）訳テキストと、その翻訳に関する個別研究を総覧し、書誌情報としてデータベース化したい。

第二に、以上の基礎作業に基づいて、イスラーム哲学における『デ・アニマ』移入の実態を明らかにし、これまでの研究成果の総轄的評価を試みたい。

## A04 古典ハンバリー派法学の成立と発展の比較思想史的研究

研究代表者 中田 考  
山口大学教育学部 助教授

### 研究目的

イスラーム法学はヒジュラ暦2～3世紀にかけて徐々に神学及びハディース学から分化し、固有のパラダイムを有する独立の学問としての体裁を整えていったが、その中でも最も後発の法学派がハンバリー法学派である。本研究は平成11年度においては、他の法学派との論争を経ながらハンバリー派法学が独自の立場を確立した完成期の古典法学綱要の神事編を翻訳すると同時に、完成期に至る発展の過程と現代までの学説の変遷を跡付け、また他学派との相違を具体的に明らかにする。

本研究では、ハンバリー派の個々の法学説の発展段階の通時的比較を縦軸、共時的な他学派派との比較を横軸に、歴史的・比較法学的分析の視座に立ってイスラーム法学の全体像の中におけるハンバリー法学派の位置づけを見通す鳥瞰図を描くことを目指す。

従来イスラーム法学の研究においては、欧米の研究であるかイスラーム世界の研究であるかを問わず、法学派間の方法論の概括的比較、個々の法学者の個別研究は存在したが、広い視野に立って各学派の特質と発展を明らかにする研究はほぼ皆無であった。特にイスラーム法学の基礎研究の立ち遅れている日本においては、法学の全体像を見失うことなく、かつ具体的な個々の規定の学説史的展開を詳細に分析するバランスの取れた研究が求められており、本研究はその先鞭をつけるものとなることも期待できる。

ハンバリー派法学研究の現在の中心地はサウディアラビア王国であり、同国では近年続々と未刊の古典が校訂・出版されている他、古典への新しい注釈書も編まれている。またハンバリー派法学中興の祖イブン・タイミーヤ、イブン・アブド・アル=ワッハーブの研究を中心に、西欧古典学の方法を踏まえた個別研究も蓄積されつつある。しかしサウディアラビアのハンバリー派法学研究はえてして学派内の学説の歴史的変遷を無視しており、他学派との比較の視点にも乏しい。その点で本研究はハンバリー派法学の内在的理解に加え、そのイスラーム法学史上の「客観的」評価を目指す点で、現在のサウディアラビアでの主流のハンバリー派研究とは方法論上一線を画している。

申請者は1992年6月から93年5月にかけて在サウディアラビア日本国大使館専門調査員として「サウディアラビアにおける宗教勢力の動向とその政治的役割」の研究

を委嘱され、ハンバリー法学派の基本的古典文献の収集、現地における研究と出版状況の調査を行うと同時に、同国におけるハンバリー派の主流派ワッハーブ派の思想、教育制度、政治活動等についての研究を行った。また96年4月から97年3月にかけては、「エジプトにおけるイスラーム学とイスラーム主義の現在」を研究課題として日本学術振興会カイロ研究連絡センター長を務め、ハンバリー派だけでなくスンナ派法学一般の古典研究の現状と、現在のイスラーム復興運動において古典法学の果たす役割を調査した。

本研究は申請者のこれらの調査の成果を踏まえた上で、現地での最新の校訂と研究を取り入れて、ハンバリー派法学の全体像とその持つ現代的意味を、専門のイスラーム法学研究者、イスラーム地域研究者のみならず法思想、政治思想、国際政治等、広く人文・社会科学の研究者一般を対象とする形で提示するものとなる。

### 研究計画・方法

申請者のこれまでの調査の成果を踏まえた上で、東京大学文学部イスラーム学科、東京大学東洋文化研究所、東洋文庫、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科等の所蔵するイスラーム法学、及びその研究文献を参照し、ハンバリー派の基本文献の校訂、出版、研究の現状を網羅的に調査し、刊本の文献リストを作成する。次いでハンバリー派法学の古典の中から、権威がありイスラーム世界で広く読まれており、かつ簡潔な法学綱要を選びその神事編の本文を邦訳し、同時に学派内の見解の対立に留意しつつ後代の諸注釈の重要なものをも訳出する。次にその典拠となるクルアーンの章句とハディースを同定する。その後、ジハードの終戦協定と庇護民契約の諸規定等の特定の主題を選び、ハンバリー派の法学書を通史的に比較検討し学説の発展と変遷を明らかにした後、ハンバリー派の通説と他学派の通説とを比較検討し、ハンバリー派法学の総合的評価を行う。

イスラーム古典法学は、欧米法学とは全く異なる概念構成と章立てを有するため、専門家以外には、どこでどのような問題が論じられているのかすら把握することが困難である。そこでイスラーム法の古典を学際的に利用できるものにするためには、アラビア語の法学用語の原語に適切な訳語を当てたうえで、原語と訳語のどちらでも検索ができる詳細なインデックスが求められる。またイスラーム古典法学はハディースとクルアーンの典拠に基づき、注釈と要約を積み重ねるスタイルで発展しているため、ハディースとクルアーンの典拠はもとより、古典基本文献、要綱、注釈書の該当箇所が参照できるようなデータベースを作成する必要がある。

イスラーム法学研究はアラビア語資料が中心となるた

め、データベース作成のためにはアラビア語を扱える多言語処理ワープロソフトに対応するコンピューターの初年度における購入が不可欠である。またアラビア語文献は西欧の図書館学の分類、整理方法が機械的に適用できないため、文献リスト、データベースの作成にはそれぞれ専門家の助力を仰ぐ必要があり、謝金の支出はそのためである。

---

#### A04 古典古代の弁論家と修辭的伝統

研究代表者 小池 澄夫  
滋賀大学教育学部 教授

##### 研究目的

西洋の最も長い教養の伝統を形成しているレトリックの紹介・研究は、わが国の西洋古典学においても最も手薄な分野で、事態の改善のために、古代ギリシアの弁論家の主要著作 当面はまずイソクラテスの全著作を翻訳・注解する。デモステネスとリュシアスについては、他の研究者の翻訳が予定されているので、その刊行後は訳語、文体など相互に照らし合わせ、この領域の研究の基礎固めと古代ギリシア語を扱うコンピュータ利用法の標準化の一助ともしたい。

##### 研究計画・方法

1. ヨーロッパの人文主義の源となったイソクラテスの著作集の翻訳とG. Mathieu & É. Brémondの校訂テキストを底本として、各種校本を照合。
2. 同著作集索引作成。固有名詞および重要概念についての希和対照。
3. 「イソクラテス 著作集 2」を京都大学学術出版会（「西洋古典叢書」シリーズ第2期）より刊行。

---

#### A04 古典期ギリシア哲学の変容 新プラトン主義による文献的・思想的改竄の問題

研究代表者 中畑 正志  
京都大学大学院文学研究科 助教授

##### 研究目的

(1)[目的] 本研究の目的は、古典期のギリシア哲学によって提示された基礎的諸概念やヴィジョンを見届けた上で、それが新プラトン主義者を中心とした紀元後の注釈と解釈の過程で、文献学的にも思想的にもどのよう

に受容され改作されたのか、という偏差を精確に測定し、中世以後の西洋の思想にとっての「古典」像の見直し、とりわけその多面的あり方に新たな光を当てることを目指す。

(2)(3)[研究の特色および位置づけ](1)に示したような視点から研究するという作業は、精密な形では、海外においてさえ萌芽的にしか行われていない。そのような研究の日本における出発点となり、同時に西洋中世や近代思想にとっての「古典」のあり方に従来とは別の角度から光を当てることは、意義ある試みと考える。

(4)[従来の研究経過] すでに言語と心にかかわる諸概念の理解の、古代と近現代との差異についていくつかの試論を展開している。

##### 研究計画・方法

プラトン及びアリストテレスの注釈の伝統が研究と教育の出発点とするアリストテレスの論理学関係の諸著作について、アリストテレス自身の思考の在処を明確に確定し、またアリストテレスの受容においてきわめて重要な意義を与えられた著作である『デ・アニマ』について、校訂、注解、翻訳を進める。以上の作業を踏まえつつ、主としてアリストテレスに対する新プラトン主義者たちの注釈を手がかりに、注釈における解釈の変遷をたどり、そこに潜む独特のイデオロギーを照らし出す。

---

#### A04 ギリシア哲学における倫理思想の再検討

研究代表者 朴 一功  
甲南女子大学文学部 助教授

##### 研究目的

ソクラテス、プラトン、アリストテレスの倫理思想を再検討する。その際、鍵になるのはプラトンのイデア論である。これまでイデア論は存在論的あるいは認識論的観点から取り上げられ、もっぱらそうした文脈だけで論じられることが多かったが、本研究はイデア論の生成過程、およびその意義をプラトンの魂論と倫理思想の観点から明らかにすることを目指す。そのためにソクラテスの哲学活動を見直し、何がプラトンをイデア論へと導いたのかを再考する。この関連で中心問題となるのは、倫理的あるいは価値的言語の本性であり、研究はプラトンの言語哲学から出発する。従来試みられなかったこの側面からのアプローチは、ギリシア哲学における倫理思想の基底を解明する意義をもつばかりか、現代の倫理学にも重要な寄与をなしうるものと考えられる。

## 研究計画・方法

これまで行なってきたソクラテス研究をさらに進めるとともに、プラトンの言語哲学の研究に着手する。そのための基礎作業として関連文献の網羅的な収集と検討を行なう。また現代の言語哲学、倫理学関連の文献についても同様の作業を行なう。他方、これと並行してアリストテレスに関しては、京都大学学術出版会による西洋古典叢書の一つとして、現在作業中の『ニコマコス倫理学』の翻訳を継続して推進する。この著作についてはすでに西洋では長期にわたる研究の蓄積があるが、そうした成果をできるかぎり踏まえて翻訳の作業を進めたい。以上の作業を行なう上で多くの情報の円滑な処理がなされねばならず、そのために関連するすべての分野で、CD-ROM化が行なわれているテキスト、および検索システムを有効に活用したい。

## B01「伝承と受容(世界)」

### B01 「李氏朝鮮における中国古典の受容と学問知の形成」

研究代表者 吉田 光男  
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

#### 研究目的

本研究は、士族(士大夫)による中国古典の受容状況と、それを通じた学問知の形成過程を、文献学的方法と現地調査により、古典籍の流入・流布・蓄積・活用という具体的な場において分析する。

李氏朝鮮時代(1392~1896年)の知的・政治的エリートである士族たちは、中国古典を積極的に受容し、その基盤の上に教養と正統意識に裏打ちされた精神世界を形成し、社会の中で支配的地位を保持していた。儒教的秩序意識が濃厚であり、学問知が社会の集団価値として広く認められていた李氏朝鮮時代において、士族たちは中国古典とりわけ儒教の古典を身につけることを自らの社会的正統性を主張する根拠としていた。中国古典籍と士族との接触状況の解明は、かれらの学問知と正統意識が構築されていく様相を浮き彫りにさせることになる。

#### 研究計画・方法

##### 研究分野

研究計画は以下の分野に分けて実行する。

1. 文献調査 日本・韓国の機関・個人を対象として、李氏朝鮮時代に中国から流入、ないしは朝鮮において刊

行された中国古典籍に関する蔵書調査を行う

2. 現地調査 韓国における古典籍の活用状況を調査する
3. 資料収集 マイクロ・フィルム、電子複写により資料を収集する
4. 情報整理 収集資料などをコンピュータで整理し、データベース化をはかる
5. 成果発表 調査・収集資料を分析し、論文等によって成果発表を行う。

##### 実行日程

おおよそ以下の日程により研究を行う。

- 5・6月 主に東京地区の資料所蔵機関を調査
- 7・8月 韓国の書院・郷校・宗家を対象とした地方調査
- 9~11月 主に西日本地区の資料所蔵機関を調査
- 12月 韓国において奎章閣・蔵書閣を調査
- 1~3月 資料の整理と分析

### B01 古ジャワ版『マハーバーラタ』の伝承と受容

研究代表者 安藤 充  
愛知学院大学文学部 助教授

#### 研究目的

本研究は、サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』が、古ジャワ語散文の「パルワ」として受容されていくプロセス、つまり、サンスクリット語『マハーバーラタ』の各巻が古ジャワ語散文に翻案されていくうえでテキストがいかなる変容をうけているかを、文献学的に解明することをめざす。具体的には次の課題の遂行が本研究の主眼となる。

1. 終わりの4巻にあたるパルワの成立が他よりもかなり後代に下るかどうか、サンスクリット原典の変容の特徴やパルワ自体の言語学的特徴を、成立年代が判明している「ウィラータパルワ」などと比較対照させて検証する。
2. 『マハーバーラタ』に取材した古ジャワ語韻文作品『パーラタユッタ』を手がかりに、サンスクリット原典~パルワ~カカウィンという伝承のプロセスの一面を解明する。
3. いかなる系統のサンスクリット・マハーバーラタが古ジャワ文学世界に伝えられたのか、古ジャワ版の読みのヴァリエーションのうちから特徴的なものに注目して考察を加える。

#### 研究計画・方法